

令和5年度 第1回江南市地域福祉計画推進委員会 会議録

日時：令和5年7月12日（水）午前10時00分～11時45分

場所：江南市防災センター 仮眠待機室・救護室

出席者：会長 柏原 正尚 副会長 石川 勇男
 委員 河合 莊太郎 委員 野呂 美鈴
 委員 暮石 浩章 委員 永田 裕美子
 委員 高橋 正博 委員 佐藤 豊子
 委員 伊代田 誠二

欠席者：委員 三ツ口 文寛 委員 中村 祥
 委員 今井 聖治 委員 船戸 正憲

事務局：江南市健康福祉部長、福祉課
 江南市社会福祉協議会事務局

傍聴者数：0名

1. 会議次第

1. あいさつ
2. 令和4年度重点プロジェクトの実績及び評価について（資料2）
3. 令和5年度重点プロジェクトの計画について（資料3）
4. 第2次江南市地域福祉計画・地域福祉活動計画骨子案について（資料4）
 - ・専門機関アンケート調査の結果について
 - ・地域福祉懇談会の結果について
5. その他

2. 会議経過

1. あいさつ

（江南市地域福祉計画推進委員会会長）

あいさつ

2. 令和4年度重点プロジェクトの実績及び評価等について

（会長）

今年度は江南市地域福祉計画・地域福祉活動計画の最終年にあたる6年目である。本日は市各課及び社会福祉協議会で昨年度計画に基づき事業等を実施した実績、今年度の計画内容、次期計画について協議をお願いする。また本委員会の開

催にあたり、地域福祉計画推進会議・地域福祉計画推進部会でいただいた意見を資料に反映している。

次第2の「令和4年度重点プロジェクトの実績及び評価等について」だが、内容が大変多く、重点プロジェクトごとに区切って協議をお願いする。「重点プロジェクト1」について事務局より説明をお願いする。

(事務局)

「重点プロジェクト1」について資料2に基づき説明

(会長)

ただいまの説明に対して意見、質問等はあるか。

評価のポイントが多岐にわたり、分かるところを重点的にいかがだろうか。

全体的な評価だが、例えば3ページの「成人教育事業」の評価・改善に「アンケートに回答した87%は「大満足・満足」とある。一方で、参加者のところの実績が90人であり、トータルで考えたとき「C1」と思う。参加した人は少ないが、「参加すると良かった」との評価なのか、どちらももう少しという部分もあるのか、その辺は分かりにくい。コロナもあり、参加者を増やすことは難しかったかもしれないが、来た人については満足度が高かったという点は評価すべきなのではないかと思う。

2つの軸があり、量的には少ないかもしれないが、質的には結構良かったため、プラス・マイナスで計画通り、あるいは計画よりも上回った内容でできたということが見えると、今後推進する際にエネルギーになるのではないかと思う。

ここではパーセンテージがあったため例に挙げたが、他の事業もそういうところが多いのではないかと思う。分かっている人がこれを見た際、なかなか分からないのではないかと思う。解説が文章になっていると結構厳しく、次期の計画に向けて何か工夫があればと思う。ここから見えるチェックの仕方や、皆さんが意見を出しやすい工夫があってもいいと思う。

1ページにある「認知症サポーター養成講座」は中学校では実績が無かった。しかし、当初の計画では高校は入っていなかったように見えるが、高校では行っているようである。その部分は計画を上回ったのではないかとも思う。幅が広がり、中学校はできなかった要素があると思う。そうした点でいえば、高齢者生きがい課だけの取り組み・推進では厳しいところがあるのではないか。実際には管轄になるかもしれない教育課との連携が今後課題になったり、社会福祉協議会のこれまでの取り組みの実績をうまく活用したりするなど、そういうことが見えると地域福祉計画の中に横断的な取り組みの良さが出るのではないかと思う。各課

の評価が強い気がしている。市民の場からは見えにくいかもしれず、課の横断は庁内の調整が強いのもかもしれない。

(委員)

小学生が認知症サポーター養成講座を受けて、どの程度理解したり、反応したかをお聞きしたい。

(会長)

受講した後どうだったかについては個々で異なるかもしれないが、例示されるものがあればイメージが湧くと思う。

(事務局)

今回の下線部は、実は令和3年度認知症サポーター養成講座が開催できなかったことがあり、令和4年度は各学校内での講座が開催できたということで、下線部と「C1」になっている。コロナ以前も小学校、高校等では実施している。

子どもたちの変化について、昔は認知症という言葉自体が認識されておらず、痴呆と言われていた。認知症という言葉を知る子どもは、講座を始めた平成20年ごろは少なかったが、現在では概ね手を挙げて回答しており、講座等で理解を深めている。

講座に関しては学校が申し込みをするので、それがたまたま小学校と高校になっているだけである。

(会長)

今の話では、計画を実施するとなっているため実施したかどうかが中心になるが、実施することで普及啓発などの意味もあるのであれば、そういう評価をしても分かりやすいと思う。子どもたちがどう理解しているのか、こういう活動につながっているなどが総括に入ると分かりやすい気もする。

(委員)

私も認知症サポーター養成講座を受けたことがあるが、いい勉強になった。小学生でも覚えれば対応が変わってくる。子どもたちがおじいさん、おばあさんに対して、「後ろから声をかけてはいけない」「一度に声をかけていけない」といったことを覚えることは、サポートする面で大事である。相手がどうなるかは分からずに対応してしまうため、講座はいいことだと思う。今後ともぜひ続けてほしい。

(事務局)

会長から、評価のあり方について意見をいただいた。3ページにある87%と90名という2つの数値をどう捉えるかということだと思う。事業の評価のあり方が文章で書いているため、市民から見て評価しづらいところがある。次期計画の策定にあたり、こうしたところを大幅に見直して、どういう事業を挙げていくのか考えていきたい。例えば、認知症サポーター養成講座では、「参加すると良かった」との意見をいただき、ある意味満足度は高い講座ではないかと思っている。そうであれば回数を重ねて、いかに受講人数や学校数を増やしていくかが目標値になってくる。3ページでいえば、87%は評価としては高く、「参加して良かった」との意見があれば、90人という数字をいかに増やすかに着眼して、目標設定をしていく事業のあり方を考えるべきだと思う。次期計画については今後、皆さんの意見をいただきながら検討していきたい。

(会長)

政策の評価は、実績を重視するとアウトカム評価になり、できたのか、できなかったのか、どの程度できたか、作ることができたのかということになってくる。普及啓発では、そういうことは難しく、人々がどうつながり啓発が進んでいったのかというプロセスの評価や、文章が良かったりすることもある。また、どれだけインパクトを与えたかというインパクト評価もあり、どこにターゲットを絞って評価をするか、政策側は難しいのではないかと思う。

ただ、地域福祉計画を作ったことによって、そういう議論が庁内で横断的に可能になることが強みではないかと思うので、事務局は横のつながり、ネットワークを推進していけば、計画作りが良かったのではないかと思う。ここは見えにくいところだが、推進していくには重要なところだと思っている。先ほどいただいた意見は場違いとは思わずに、感じたことは言っていたかとありがたい。

それでは、「重点プロジェクト2」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

「重点プロジェクト2」について資料2に基づき説明

(会長)

ただ今の説明について意見、質問等はないか。

昨今、防災については意識が高くなっている。大雨などによる河川の氾濫が大きく、地域防災力について啓発に力を入れなければならない。5ページに消防団、9ページにも地域共生社会の話がある。地域福祉計画と要介護の在宅高齢者

や障がいがある人たちに対する防災、災害時の対応、福祉避難所の設置・運営法についても最近はよく言われている。

要配慮者の方たちに対する備品などの整備状況をチェックしながら進め、自主防災力を高める際に地域共生社会としても考えていかなければいけないと思う。これだけ災害が多いと取り残されやすいのは要配慮者である。人材をどう育成するか、どういう人を担い手として増やしていくかをイメージがなければ、人が多くなっただけでは厳しいと思っている。そういう観点からでもいいので意見、質問をいただければと思う。

(委員)

民生委員として地域の災害弱者の名簿を持っているが、そういう人たちの防災訓練参加について把握したことがない。自主防災会の訓練は形だけになってしまっている。市内でも水は漬かるが、極端には漬からないため切迫感がない。線状降水帯が発生すれば床上浸水になる地区も出てきそうだが、そういうことが現在想定されていない。

私は自主防災会のメンバーに入っておらず、訓練にも参加したこともない。防災会に民生委員などを参加・協力させ、そういう組織をつくっていかねばと思う。名簿があるからどこにそういう人がいるか分かるが、実際に話したことも行ったこともない。

(会長)

できているか、できていないかとなると、発言しにくいかもしれないが、ちょっとした発言が課題となり、今後の展開につながるのを自由に発言していただきたい。できていないことについては発言しにくいだろうが、気になったことは指摘してほしい。

(委員)

北部中学校では、コミュニティスクールの柱の1つに地域防災を入れている。毎年夏休みに防災に関する取り組みを行い、本年度は避難所開設を計画している。その計画に対して民生委員にも案内を出すように意見があり、民生児童委員の集まりで案内したところ、何人かは避難所開設の折に来ていただき、一緒に取り組んでいただけることになっている。様々な場でこういう話題を出し、単体の取り組みを横へのつながりに広げることで、より実践的なものになるのではないかと思う。どの学校でも防災を中心に行っているわけではないので、参考までに発言した。

(会長)

個の取り組みについての発言が「そういうところもあるのではないか」「次に他でやろう」との話につながる。皆さんの貴重な意見はありがたい。実際の取り組みを事務局に伝えて情報を集めると、次の計画推進や評価にもつながる。後でもおっしゃっていただければと思う。

続いて「重点プロジェクト3」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

「重点プロジェクト3」について資料2を基に説明

(会長)

ただ今の説明に対して意見等はあるか。

12ページに自主防災組織の訓練の話なども出ているが、ネットワークづくりやその強化は、成果を出そうとすると会合や取り組みが増える傾向になる。特に専門職との連携が入っているが、専門職は全国的に大変な状況である。評価や成果を出そうとすると、回数を増やすことになり、大変さに上乗せされてネットワークがつくられたりして、よいことばかりではない。逆に、不要なものを減らしたり、効率化を図ったりすることも評価していいのではないか。

特に重層的と言いだめると、より重なってくるので、同じような会議が何回も行われ、グループ独自でとなるともっと増えるのではないかと思う。

担い手が、点が線につながったり面に広がったりしていくなかでやめたりする人が出てくると、地域福祉の推進がもったいないことになる。特に専門職と地域の人たちとのつながりの場合、そこはより慎重に進める必要があると感じている。そういう面では、皆さんの取り組みのなかで、「これは少し多すぎるのではないか」「そうはいつでもここは大事だ」ということがあれば発言していただきたい。ネットワークのところではそう感じていたが、他の観点でも構わない。

(委員)

取り組みの評価が、「コロナ禍でいろいろな事業が中止」との表現だった。コロナ禍で事業が中止されるなか、令和4年度は何とかやろうという方向で頑張ったと思うが、令和5年度に向けて改めて今の事業のあり方を考え、さらにスキルアップするような取り組みを進めてほしいと、評価の表現を見て感じた。

(会長)

難しいコメントかもしれないが、事務局からは何かあるか。

(事務局)

コロナ禍でオンライン会議や書面会議など、様々な形での開催だった。中止せず、接触を減らして行うために、ICTの活用などを交えながら新しい取り組みを試みてきた。一番大きいのはICTの活用である。参加できない方も違う形で参加できる機会が増えたと思う。マイナスのことばかりではなく、コロナ禍での経験を生かしていければと思っている。社会福祉協議会としてはそういう取り組みはできるが、市には制約もあり難しい部分はあったかと思う。これまでの経験を生かしながらできるといいと感じている。

(会長)

皆さんもコロナで大変だったというだけではなく、地域では楽になった経験もあるのではないかと思う。会合が少なくなったことが、自分の生活を中心に考えられる時間もできたのではないか。そうしたなかで、人と会ってよかったならば残していき、書面やオンラインでもいいのであればそうしていけばいい。コロナはマイナスばかりではないと考えたほうが、この時期の評価や次年度以降の計画につながるのではないかと思う。これまで地域では顔を合わせての活動量が多くなっていく傾向にあり、頑張るほど大変な人が多い。地域と自分の生活のバランスを考える必要があると感じている。

続いて、次第の3「令和5年度重点プロジェクトの計画について」だが、これも内容が非常に多いため、重点プロジェクトごとに区切って協議をしていきたい。「重点プロジェクト1」について説明をお願いします。

3. 令和5年度重点プロジェクトの計画について

(事務局)

「重点プロジェクト1」について資料3に基づき説明

(会長)

今年度の取り組みについて意見等はないか。

地域福祉は様々な政策が出てきており、住民は大変ではないかと思う。取り組みをいかに分かりやすく、何を行っていくべきかポイントを絞って、子どもたちにも分かる話ができればいいかもしれない。様々な人たちに地域へ意識を向けてもらうことが大事である。昨今の政策は難しく、国が出すものも多岐にわたっており、推進時にいかにシンプルにするかが大事である。シンポジウムも今回は地域福祉の必要性について重点的に取り組むと書いてあるため、そういったところは大事ではないかと思う。

それでは、「重点プロジェクト2」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

「重点プロジェクト2」について資料3に基づき説明

(会長)

6ページにある「専門職による多職種交流会」は、これまでも行ってきたものがあるのか、それとも会合が中心で、別の企画で新たに交流会みたいなことをしようとしているのか。専門職から意見が出てこうした交流会を考えたのか、状況を教えてほしい。

(事務局)

社会福祉協議会は、地域ケア推進会議の事務局会議のメンバーとして参加している。地域ケア推進会議の中で、ケアマネジャーやサービス系の訪問介護の事業所など、多職種の専門職が一堂に会してそれぞれの立場で何をしているかといった交流会を以前実施したことがある。コロナ禍で実施ができなかったため、本年度開催するかどうかを含めて検討している。

(会長)

成果を示す事例はあるか。

(事務局)

直接参加したことはないが、福祉職や医療職などの専門職との間で意見交換をしたり、現場的なこともあり、このような交流会で意見交換できたことはよかったと、会議の意見として上がっている。

(会長)

専門職が忙しいなかで、交流会に積極的な意義があれば参加してみようとなるかもしれないが、やっていないと呼びかけても忙しいということで終わってしまい、もったいないと思う。

続いて、「重点プロジェクト3」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

「重点プロジェクト3」について資料3に基づき説明

(会長)

ただ今の説明に対して意見、質問等あるか。

(委員)

8ページの「母子等福祉推進事業」(こども政策課)の欄の右端に「会員数の増加を目指す」とあるが、何の会か。

(事務局)

こども政策課が担当している母子寡婦福祉会がある。母子家庭で参加していない家庭があり、会員数は若干減少傾向にあったため、会員数を増やしていくことを目的にしている。

(委員)

登録の募集というか、案内は出しているのか。

(事務局)

こちらから案内するのは難しいところがある。

(委員)

全ての人が自動的に会員になるシステムではないということか。

(事務局)

そうである。

(会長)

何らかの支援を受けた際、案内があって加入したりするのか。

(事務局)

相談を受けたりした際、問い合わせがあれば市が会を紹介することはある。

(委員)

母子父子寡婦福祉資金などを借りるときの関係で行っているのか。

(事務局)

相互扶助などの他、各種の要望活動を行っていく際に会としての母体があったほうがいいとの観点である。

(会長)

資料3には、「目指す」と書いてあるが、会員数を増やそうという考えなのか。

(事務局)

ひとり親家庭のなかで、経済的な事情などで教育問題が起きたりしており、そういう相談が多く寄せられている。母子、父子家庭の福祉施策をもっと充実していかなければいけないとの観点から、会員数はひとつのバロメーターになるため、会員数の増加を掲げている。

(委員)

江南市の母子相談員はいるのか。

(事務局)

いる。

(会長)

会員数は現在どの程度いるのか。母子家庭のイメージから、結構入っているのか、あまり入っていないのか、皆さんには分かりにくいと思う。

(事務局)

手元に資料がなく分からないが、ひとり親家庭の施策を充実させることには難しい部分があるため、会員数を増やして充実させていくことが突破口になるのではないかと考えている。

(副会長)

母子寡婦福祉会の名称を変えたほうがいいという意見を聞いたことがあるが、全国的にそういう名称を使っているのか。

(事務局)

全国的にどうかは分からない。

(委員)

母子寡婦などという、差別用語のような感じがして暗いイメージがある。しかし、母子父子寡婦福祉資金の関係は、高校や大学進学の際の入学資金を無利子で借りられる。

(会長)

それは、会員かどうかは関係ない。名前が出るかもしれないため会員になるのを敬遠する人がいれば、行政も強くは言いにくい。「目指す」としすぎないほうがいいのかかもしれないという気はしている。

(事務局)

会員数は、昨年度は76人になっている。全体数からいうと一部ということになっている。課としては増加させたいと考えている。

(事務局)

組織に加わると負担が増えたり、忙しくなったりすることもある。老人クラブもそうだし、市子ども会連絡協議会も会員について難しいところがある。組織として活動することの意義もあり、制度を変えていくことも考える必要がある。負担が増えるため入っていただけないことも最近の傾向だが、メリットも出しながら工夫していくといいのではないかと考えている。名前に抵抗があって入らないということもある。たくさんの人に入っていただくように努力をするという意味での「目指す」ということではないかと思う。

(会長)

名前について通称をうまく使うのは様々なところでなされている。リニューアルしたようなイメージもあり、存在意義をうまく出そうということはあるかと思う。庁内でも話してみるといいと思う。

(委員)

お手伝いの範囲を超えるほど兄弟の面倒を見ている子どもがいる家庭を知っている。そういうことについて市は把握し、何らかの手立てを行う考えはあるのか。

(事務局)

家庭の状況は千差万別で、行政が状況を把握しづらいところはあるが、学校などから情報を得ながら、要支援の家庭だと把握できれば、親と面会し、どのようなサポートが必要か、提案していくことはさせていただいている。

よくあるのが、ひとり親の家庭で、父親や母親が疲れ切ってしまう場合もあるため、「レスパイト」といって、休む機会を提供するために子ども預かる事業の案内もしている。そういう家庭の情報をつかんでいけば、市に言っていただくと動きたいと思う。

(委員)

情報を得ている私が知らせるのか、家庭に「相談してはどうか」と言うのがいいのか。

(事務局)

一番いいのは本人の了解を得ることである。困っている程度が強い人については、身動きが取れない状態になっている場合も考えられる。市に伝えてもいいとの同意を得て、委員から市に伝えることはあり得る。本人が同意しているのであれば訪問も可能になるので、協力していただくと現場は動きやすい。

(委員)

子どもの手伝い程度でなくらいに下の子どものおもりをしていると聞いた。親はそれを何とも思っていない様子で、母親に「相談してみてもどうか」というのは違う感じがする。

(事務局)

そのあたりは担当課によく聞いてみたいと思う。

(会長)

10 ページの「子ども貧困対策」にある学習支援は、全国的に注目されつつある。コロナ禍で関わるのが少ないなか、大学生など比較的若い人たちと話を聞き、その後の進路につなげるという話を他の市から聞いたことがある。自分の家族以外で斜め上の他者とどう関わるか。地域で大事になるのは、子どもの時ではないかと思う。今年取り組みで課題やよかったことがあれば、計画の評価に記載するといいと感じた。

(委員)

子どもや親子に関わる団体は様々あるが、情報を得ることが容易になった現在、団体に加わらなくても仲間同士で情報は分かる。会に入って何かメリットがあるのかという部分がある一方で、「役が回ってくるだけ」という声も聞き、解散になった会もある。仲間同士の横のつながりで情報は入ってきて、自分たちで勉強しようと小さな会を立ち上げたところもあると聞いており、会員を「増やす」という考えはどうかと思う。

(会長)

単純に増やせばいいというものではないところが見え隠れするのが、今日の議論だったと思う。増えなかったから評価を低くしないようにしたほうがいいと思う。健闘して、いい方向に向かっているという話になればいいのではないかと、今の話を聞いて思った。

(事務局)

ご指摘の通りだと思う。行政のサービス情報はインターネットでどんどん出ている。そのため会に入らないと情報が得られないなどということはない。若い人たちは、ネットやSNSなどを通じてつながっていくので、母子寡婦福祉会という会に存在意義があるのかといわれると、今の若いお母さんたちにとっては「入ると何かをやらされる」などと映っている可能性は非常に大きいと感じている。「会員数の増加を目指す」と書いてはあるが、会の存続意義についても一度見詰め直す必要はあると考えている。

(会長)

多岐にわたる福祉の相談でマルチに対応できる人がどれだけいるか、担当になった人は大変ではないかと思う。庁内の調整も含めると、組織再編をしたとしても、うまくいくばかりではないと思う。取り組んだことについては評価したほうがいいと思うので、うまくいかなかったからといって、計画通りではないとの評価にはせず、恐れずに進めてほしい。

他の市町村でも同じようなことがあり、これまで専門でしていた人でも、分野が違えば福祉も多岐にわたるので分かりにくいことはある。制度もどんどん変わってくるので、ワンストップの相談窓口の方たちと他の部分がどうつながっているのかという庁内体制あるいは社協との関係も見直しが必要になるのではないかと。

例えば、子どもを育てる世代に対しても、高齢者に対しても同じように対応しなくてはいけないことになると、ワンストップの窓口をどうしていくかは考える

必要があるし、庁内の1カ所に集中させていいのかということもある。その辺を見える化しながら、計画は「こうなりました」ということを案内したり、様々なところに情報が伝わるようにしていくことも、再編と併せて検討して進めていくほうがいいと感じた。

(事務局)

後ほど説明するが、今の指摘は重層的支援体制のあり方の話になってくると思う。概要はこれから検討することになるが、職員1人のみで対応することにはならないようにしていきたい。この重層をするにあたり、関係機関との連携が最も重要である。それが組織としての会議体をもって総合的に、包括的に進めていくことが必要になる。職員1人で解決できるものでもなく、そういうところをどのような形で具現化していくか考えていきたい。どのような形になるのかはまだ分からないが、このあたりはしっかり検討して示していきたい。

(会長)

他にいかがだろうか。これまでの資料2、3について言い忘れた点はないか。

それでは、次第の4「第2次江南市地域福祉計画・地域福祉活動計画の骨子案について」の説明を事務局に願います。

(事務局)

次第4「第2次江南市地域福祉計画・地域福祉活動計画の骨子案について」を資料4に基づき説明

(会長)

ただ今の説明に対して意見、質問等はないか。

(副会長)

最終ページの42ページについて、第2次江南市地域福祉計画と地域福祉活動計画の中に、第5章として成年後見制度利用促進計画、第6章に再犯防止推進計画という章立てで、計画の中に計画が入ることか。

他での例を調べたところ、地域防災計画の中には編立てで風水害等の災害対策計画編、地震対策計画という編立てになっており、計画の中に計画が章立てで出てくることに違和感がある。「第5章 成年後見制度利用促進計画編」とすればいいのではないか。総論での「計画の策定にあたって」のなかで、2つの新しい計画が盛り込まれたとの文言を入れるべきではないかと思った。

また、第2次計画の基本理念「みんなで支え、みんなで育む 『しあわせ』なまち 江南」は変わらないという提案なのか。その辺のそもそも論の議論をしてほしい。

(事務局)

成年後見と再犯防止の章立てなどについては、他市町の状況を見ると、地域福祉計画の中に一緒に盛り込んでおり、その辺を確認しながら江南市に合った形で提示させていただきたい。

理念等については、第1次計画の総括的な話を踏まえた話になると思うが、次回に示したい。先ほど4年度の計画の総括が「C1」だったことはご覧いただいたが、コロナ禍を踏まえながらも市や社協は頑張ってきたとの認識で、第1次計画を否定するものではないと現状、判断をしている。従って、理念として抜本的に変えていくというよりは、ある程度継承しながら発展させていく形で、第2次計画を位置付けていきたいと考えている。

また、市総合計画は策定作業に取り掛かっており、今年度末に固まってくるため、地域福祉計画との両にらみで整合性を取りながら作業を進める。総合計画も抜本的な改正ではなく、10年計画の中の後期計画として、ある程度継承しながら策定することが総合計画の方向性と認識している。そうしたなかで、地域福祉計画も抜本的に変えるのではなく、継承が念頭にある。

(会長)

評価について、現状の統計が市全体の統計で、より小区分化して地域を考えていくことになる、全体の統計的な量と細かいところとの整合性が図りにくくなっていくのではないかと思っている。しかし、140地区の量を小さく出しても仕方がないような気もしている。どういう評価をしたほうが地域福祉計画としていいのか、記載も含めて検討したほうが良いと感じた。

総論的にも計画の基本目標のところはどういう実績が見られるか、あるいはプロセスを考えていくなど、現状と合わせて一言でも記載があると評価がしやすいと思う。現在過渡期のため、計画を作って推進していくうちに、評価しやすかったとなれば残していかないと、いきなり全部は難しいと考える。アンケートも採り、統計も考えていると思うので、有効に使ったほうが良いと感じている。

第1次計画の中身を、どこまでこの中に入れるかは考えたほうが良いと思う。第1次計画でこうだったということ少し盛り込み、コロナ禍によるものも残しておいたほうが良いような気がする。現状に入れたほうが良いのか、第1次計画の評価として項目を入れていくのが良いのかは、全体の体裁も含めての話と思うが検討してほしい。

続いて、次第の5に移る。「その他」について事務局から説明をお願いします。

(事務局、社協)

次第5「その他」について説明

(会長)

意見等はないか。

それでは、本日の議題はこれで終了し、進行を事務局にお返しする。

議題終了